

特定研究（一般）

「対馬芸術実験プロジェクトの実施

—東アジアにおける文化交流モデルの形成を目的として— 報告

報告：伊東敏光、藤井匡、黒田大祐



図1. 対馬の風景（烏帽子岳山頂より浅生湾を望む）

研究代表者：伊東敏光（芸術学部教授）

研究分担者：チャールズ・ウォーゼン（芸術学部准教授）

研究協力者：藤井 匡（芸術学部協力研究員、元宇部市野彫刻美術館学芸員、専門領域：彫刻史）、入江早耶（芸術学部協力研究員）、丸橋光生（芸術学部チーピングアシスタント）、チョ・ヒョンス（博士後期課程）、黒田大祐（博士後期課程）、田中圭子（博士前期課程）、山本辰典（博士前期課程）

研究概要と各アーティストの取り組み

報告：藤井匡

研究概要

本研究の舞台である対馬は、古代から日本列島と中国大陸・朝鮮半島との中継地点として栄え、複数の文化が混雑する中から独自の文化を築き上げてきた地域である。本研究は、この土地の独自性を基盤として、現代アートによる新たな魅力の発見・発信を目的に、2011年の夏から秋にかけて、現地制作と完成作品の発表を行った。

本研究では対馬市が主催する現代アートプロジェクト「対馬アートファンタジア 2011」と連携し、広島市立大学芸術学部の教員2名（伊東、ウォーゼン）、協力研究員（入江）、TA（丸橋）、博士後期課程学生（ヒョンス、黒田）、博士前期課程学生（田中）の7名が、アーティストとして作品制作と展示をおこなった。制作では、いわゆるサイト・スペシフィックと呼ばれるその土地の文脈に呼応した美術作品の制作・展示を通して、その地域に根差したアートのあり

方や、社会とアートの新たな関係性を考察することが志向された。そのため、制作手順としては、① 下見を行って各自の展示場所を決定する、② 制作は原則として対馬市に滞在して行う、③ 作品の材料はできる限り現地で入手できるものを使う、④ アーティストトークや子供たちのためのワークショップを行い地域住民とのコミュニケーションを図る、ということが進められた。

こうした方向性を具体化するために、展覧会のタイトルを「ツシマリンクス」とし、制作と展示に際しては「場を繋ぐ」「物を繋ぐ」「人を繋ぐ」「時を繋ぐ」という、四つのキーワードを掲げた。

「場を繋ぐ」は、サイト・スペシフィックなアート作品の制作・展示である。本土の価値観を対馬に当て嵌めるのではなく、対馬という場所から全てを発想することを意味する。そのため、これまでと全く傾向の違う作品を展開したアーティストもいる。

「物を繋ぐ」は、対馬で入手した材料を用いて作品を制作することである。広島との距離から大型の材料の運搬が（経費的に）困難であったことにも起因するが、現地で魅力的な素材に多数出会ったことが最大の要因である。特に、国境を越えて流れつく漂着物は肯定と否定の両義的な発想を刺激した。また、ツシマヤマネコや対州馬、江戸時代の朝鮮通信使船など、対馬にまつわるモチーフも取り上げられている。

「人を繋ぐ」は、公開制作やアーティストトーク、ワークショップの開催。アトリエが中心部から離れた場所にしか確保できなかったため、公開制作に訪れる市民は多くはなかったが、来訪者は制作中の作品に対して様々な質問を投げかけるなど、交流が図られた。まちの中心部で実施されたアーティストトークやワークショップには多数の市民が参加。特にワークショップは地元の厳原八幡宮の大祭と連携して行うことができたため、市民が普段あまり馴染みのない現代アートに触れる契機をつくりだすことができた。

「時を繋ぐ」は、歴史的な場所と現在の生活の場所の両方を展示会場として設定した。歴史的な場所としては、江戸時代の朝鮮通信使ゆかりの地である西山寺と隣接する築200年以上という古民家。明治期の文学者である半井桃水の記念館。戦前・戦中に朝鮮半島へ渡る多くの人が利用したという旧旅館有明荘。現在の生活に密着した場所としては、対馬市観光物産館、対馬市交流センター。そして、市内で営業する飲食店である「お多幸」にも協力を依頼し、店舗内への展示を行うこともできた。

なお、展覧会のタイトルである「ツシマリンクス」とは、こうした多様な「繋がり」を表わすLINKSと対馬の象徴であるツシマヤマネコ（LYNX）の同音意義語を重ね合わせたものである。対馬の文化の独自性いかにアプローチするか、その中で「中心一周辺」という問題構制を越えた、新しいネットワーク型の思考を見出すことができるか。対馬における、アート作品の制作と発表を通じた研究活動を表象する言葉として使用している。

各アーティストの取り組み

チャールズ・ウォーゼン《迷子》対馬市交流センター（図2）

作者は以前から、消波ブロックへの関心を語っていた。波による海岸浸食を防ぐ目的で多数を組み合わせて使うために開発された形だが、彫刻として見た場合にも興味深いという。この作品では、対馬の海岸でも多く使われている消波ブロックをひとつだけ市街地に設置し、そこに《迷子》という題名がつけられた。通常のものでありながら、通常ではない文脈が与えられたことから様々な連想が引き出されていく。まちのなかで孤立した迷子とは何を暗示しているのだろうか。



図2. チャールズ・ウォーゼン《迷子》対馬市交流センター

チャールズ・ウォーゼン《Omoo》対馬市交流センター（図3）

題名の《オムー》は19世紀のアメリカの小説家ハーマン・メルヴィルの小説タイトルからの引用。南太平洋・マルキーズ諸島の言葉で島から島へと渡り歩く放浪者を意味している。対馬の海岸に漂着した多数のブイ（浮標）は、まさしくそのような存在だ。近代国家の成立によって、海の上にも国境線が引かれるようになったが、実際には目に見えない境界を越えて物は往来する。その「自由」には、画一的な近代化＝欧米化とは別の可能性を見出せるかもしれない。

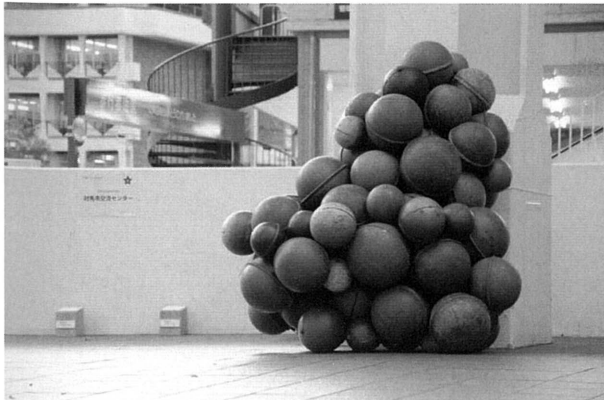


図3. チャールズ・ウォーゼン《Omoo》対馬市交流センター

伊東敏光《月の教え》西山寺（図4）

対話するかのように向かい合って座る二人の人物。素材に用いられたのは、薄い板の格好をした石と、海岸で洗われて丸くなった石。ともに対馬のもので、島内では古くから建造物などに使われてきた。特に、板のような石は、対馬特有の「石屋根」の材料でもある。水平に重ねられた石の間から巖原港の風景が見え、遠くに続く水平線へと想像を広げる。江戸時代の朝鮮通信使ゆかりの地に置かれた、対馬と朝鮮半島をつなぐ海の道を示すモニュメントとなっている。



図4. 伊東敏光《月の教え》西山寺

伊東敏光《対風景》西山寺（図5）

座した人物と横臥した人物。だが、よく見ると山や川が刻まれていることに気づくだろう。これは対馬の上島と下島を象ったものでもあるのだ。作者は近年、風景をモチーフにした彫刻に取り組んできた。その中で発見されたのが、人物と風景を重ね合わせる方法である。彫刻を観る時、鑑賞者は彫刻の外側にいるより他はない。だが、それでは対馬の内側にいる時の感覚から外れてしまう。写実的な方法では表わせないものを表すための実験的な方法が探求されている。



図5. 伊東敏光《対風景》西山寺

伊東敏光《宮島鼠》旧旅館有明荘 (図6)

《対風景》と同様の考えで制作された作品。作者が住んでいる広島市から近い宮島(厳島)に、ネズミの姿が重ね合わされている。風景を彫刻にする際の困難は、延々と広がるものをどのように区切るかにあるという。その点で、海によって輪郭が形作られている島は彫刻化するのに適していると言えるだろう。対馬と宮島は、平地が少ない割には山が高い、量感の豊かな形態が似ている。それだけではない。大陸や半島との交通に関わって発展した歴史も共通している。



図6. 伊東敏光《宮島鼠》旧旅館有明荘

田中圭子《白隠》旧旅館有明荘 (図8)

かつて、日本から大陸・半島に渡る人々で賑わったという古い旅館。その小さな一室が、電化製品や家具まで含めてフェルトで全て覆われている。窓から入る光と一体化した、白一色の透明感のある空間が作り出された。それはこの場所の記憶が失われないように包み込むかのように見える。あるいは、そうした記憶を消して新しい空間を生み出そうとしているのかもしれない。おそらくは両方の意味で、過去に滞在した人々と現在ここにいる自分との関係の再構築が図られている。

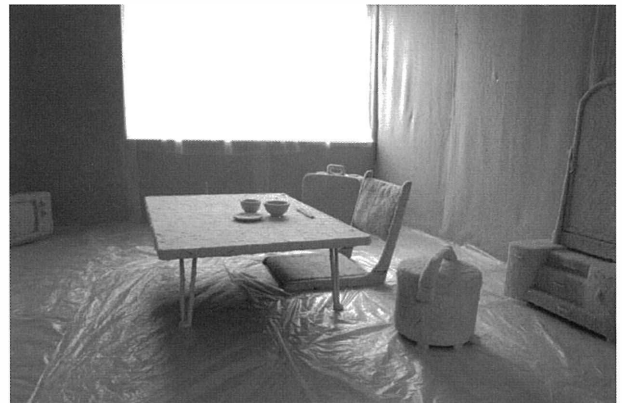


図8. 田中圭子《白隠》旧旅館有明荘

田中圭子《陰陽礼讃》西山寺隣接古民家 (図7)

島内の古い家屋で使われていた古い畳。その中から藁を抜き取り、束ねて二つの立体物をつくり出した。陰と陽、あるいは受け入れるものと受け入れられるもの。両者が呼応して一つの世界観を形成する。交流とは一方的な授受ではなく、相互の交通によって成立する中心のない世界である。素材の元となる稲作は、交通によって東アジア圏に広がり、共通項の多い文化を育んできた。近代以降に引かれてしまった国境線を前提にするのとは違う可能性は考えられないのだろうか。

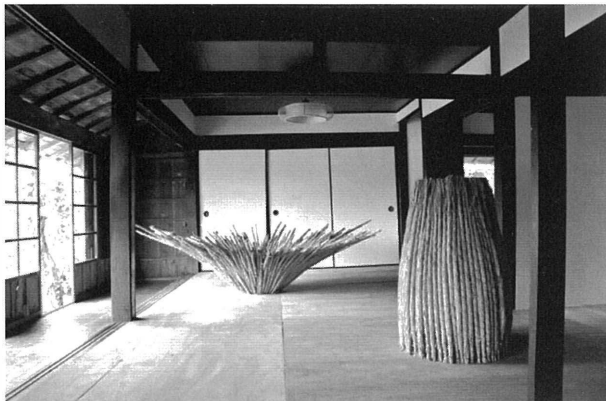


図7. 田中圭子《陰陽礼讃》西山寺隣接古民家

チョ・ヒونس《瞑想に向かう》西山寺 (図9)

モニュメントのように垂直に立ち上がる姿をしているが、決して存在感の強さだけを求めたものではない。薄い銅板を叩き出してつくられた柔らかい形態は、空間との調和を重視したもののように感じられる。下方の鋭いラインは山々の稜線を示しており、東洋の山水画が求めた世俗を離れた理想郷の存在を暗示する。また、上方の幾何学模様は仏教寺院に見られる卍崩しの組子を連想させる。歴史的に東アジアが共有してきた文化を読み込んでいく面白さをもった作品である。



図9. チョ

チョ・ヒヨンス《灯台の光》西山寺 (図 10)

金属を加工するための伝統的な工芸技法である鍛金。金属板をハンマーで叩いて形を整えていくもので、日本美術史上の優品も多い。銅などの金属は弥生時代に他のテクノロジーと同様に大陸から伝えられたもので、その中継点に対馬があったことを思い起こさせる。同様に、大陸からもたらされた技術として発展していく漆の発色も美しい。花器として使用できる工芸品としての性格ももっているが、《灯台の光》という題名によって、島にある寺院という場所性に結びついた表現になっている。



図 10. チョ・ヒヨンス《灯台の光》西山寺

チョ・ヒヨンス《出会い》西山寺 (図 11)

鍛金技法でおおよその形をつくり、その表面に熔接による独特の質感を与えている。ゴツゴツした岩肌の間を金箔を使って表わした滝が流れ落ちている。正面性が強く、奥行きがあまりない形態のため、滝は水墨画に見られるようなジグザグに織り込んだ姿が採られている。そしてこの折れ曲がった線は、男性と女性がキスをしている様子をキュビズム的に示しているのだ。擬人化を通して人間と自然が融合する東洋的な自然観を表現し、開発一辺倒の問題点を突いている。



図 11. チョ・ヒヨンス《出会い》西山寺

黒田大祐《新しい道》半井桃水館 (図 12)

民俗学者・宮本常一の著作『忘れられた日本人』(岩波書店、1984年)は対馬から書き始められる。膨大なフィールドワークを通して、記録に残らなかった日本や日本人の姿を明らかにしようとしたのである。同時に、離島と本土との経済格差を憂い、離島振興法(1953年)の制定に尽力する。だが、開発によって、忘れられるべきでないものが更に忘れられるという矛盾に直面することになった。日本の近代化とは何だったのか。一人の民俗学者の視点から、答えのない問いを投げかける。



図 12. 黒田大祐《新しい道》半井桃水館

黒田大祐《サンダル通信使》旧旅館有明荘 (図 13)

対馬の海岸には多くの漂着物が打ち上げられる。その中で特に目につくものにゴム製のサンダルがある。作者は島内の海岸を回り多くのサンダルを収集、それを素材に彫刻を制作した。モチーフは江戸時代の朝鮮通信使船。船とサンダルはともに、人間をその上に乗せて運ぶ機能をもつが、大量消費社会の中で廃棄されたサンダルはむしろ人間の不在感を示す。ここでの素材とモチーフの組み合わせは、過去と現在の類似性ではなく差異性を際立たせるように感じられる。

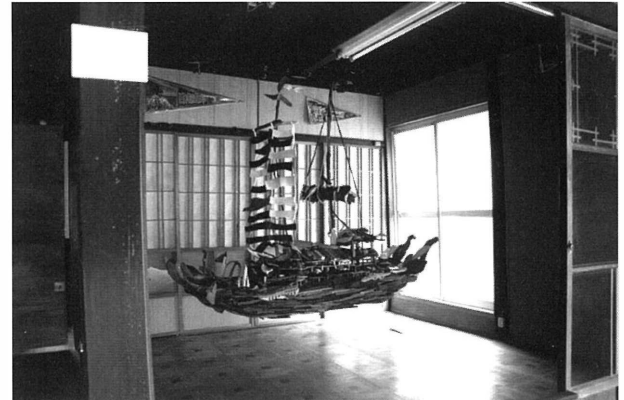


図 13. 黒田大祐《サンダル通信使》旧旅館有明荘

黒田大祐《うず》旧旅館有明荘 (図 14)

対馬の特産品であるイカの一夜干。脱水・乾燥を促進するための回転機を島内の港で見かけることが多く、この土地の風景のひとつとなっている。作者は、この回転機を借り受け、イカの代わりに海岸で拾ったガラス瓶やペットボトルを取りつけた。照明を当てられた透明な素材は輝く美しいイメージを構成する。漂着した廃棄物を回転させることは無意味に思われるかもしれないが、ここには知恵や工夫によって課題が解決に向かうというメッセージが込められている。

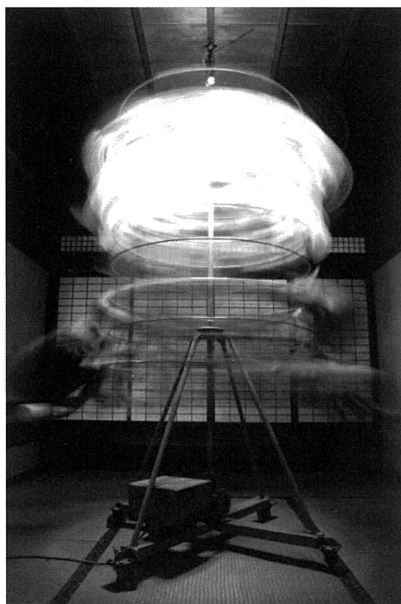


図 14. 黒田大祐《うず》旧旅館有明荘

黒田大祐《風》旧旅館有明荘 (図 15)

円形のパイプに横倒しの状態で取り付けられた 21 台の扇風機。それぞれが首を振りながら風を送っている。畳の敷かれた部屋と扇風機の取り合わせは見慣れているがゆえに、いっそうの違和感を与える作品になっている。扇風機はバラバラの動きをするために統一感は薄い。同じように見えるものの中の「違い」が強調されてくるのだ。社会、国家、民族などは、この「違い」を消去することで成り立つ。普段は覆い隠されているものについての再考を問いかける作品である。

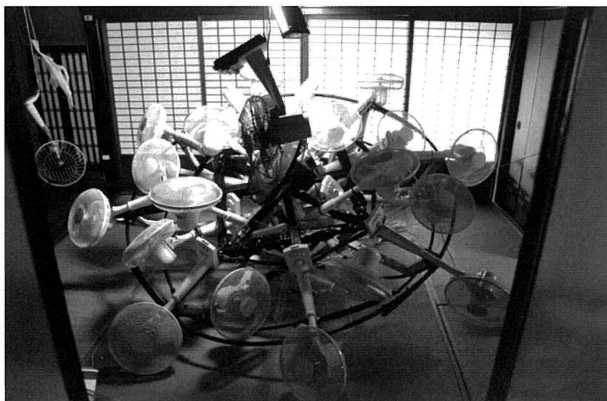


図 15. 黒田大祐《風》旧旅館有明荘

黒田大祐《こま》西山寺隣接古民家 (図 16)

厳原港を見下ろす高台にある築 200 年を超えるという古民家。日本と大陸・半島を行き来する人々を長い間見続けてきた場所である。この古民家の改装に際して捨てられるはずだった将棋の駒が素材に使用される。駒を山のように積んで対馬の地形を表現し、ひとつの駒から海を泳ぐイカを彫り出した。イカは、漁業という目的も含め、対馬に集まる人々を示し、将棋というゲームが人々のコミュニケーションを表わす。古くから交流拠点として栄えた対馬を象徴する作品である。



図 16. 黒田大祐《こま》西山寺隣接古民家

丸橋光生《Taming Plastics / 対馬の景色》半井桃水館 (図 17)

対馬の中央部に位置する浅茅湾。複雑に入り組んだリアス式海岸と多数の島々からなる風光明媚な観光地である。同時に、浅茅湾にはもうひとつの顔がある。飛鳥時代に築かれた金田城、中世の倭寇、近代のロシア軍艦占領事件。その後には日本海軍により砲台が設置された軍事的な重要地点でもある。美しいものとリアルなものが交差する風景。そのイメージを、現在の私たちの生活に新しい美しさとリアリティをもたらした 100 円均一ショップの商品を重ね合わせて表現する。



図 17. 丸橋光生《Taming Plastics / 対馬の景色》半井桃水館

丸橋光生《Taming Plastics / 対州馬》西山寺隣接古民家 (図 18)
 モチーフは対州馬。近代化の過程で馬種が絶滅した中、現在まで残る日本古来種の馬のひとつである。他方、素材には主にアジア諸国から輸入される100円均一ショップのプラスチック製品が使われている。モチーフと素材の間に大きな落差が感じられるかもしれないが、対州馬も東アジア歴史的な交流によって成立したことが分かる。モチーフと素材、それぞれが抱えている背景を読み込んでいくことから、日本の歴史と現在が見えてくる。

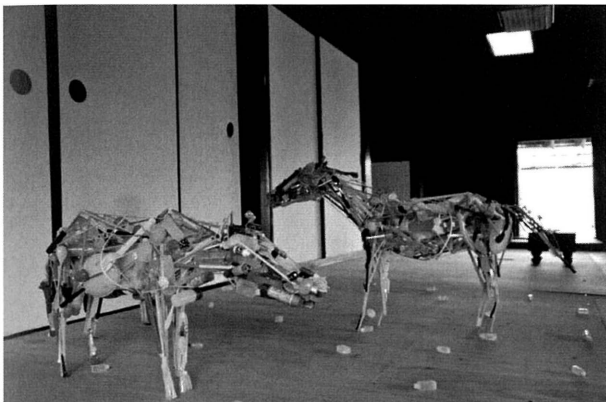


図 18. 丸橋光生《Taming Plastics / 対州馬》西山寺隣接古民家

入江早耶《ツシマヤマネコダスト》(図 19,20,21)

島内唯一の蔵元でつくられている焼酎「山ねこ」。このラベルに描かれたイラストを消しゴムで消し、その消しカスで立体物を制作する。絵に描かれたものを現実化する試みだ。背景には、かつて焼酎自体が「山ねこ」の隠語で呼ばれていた対馬独自の文化がある。展示場所は3ヶ所。主題は同一だが、場所に合わせて少しずつ違った表現を取り入れている。現地に滞在し、それぞれの場所の違いを読み取り、作品に反映させることを通して、リアルな感覚との繋がりを導き出す。



図 19. 入江早耶《ツシマヤマネコダスト》西山寺隣接古民家



図 20. 入江早耶《ツシマヤマネコダスト》対馬市観光物産館



図 21. 入江早耶《ツシマヤマネコダスト》酒処「お多幸」

交流と教育普及の取り組み

公開制作

日 時：8月後半～9月末

会 場：旧林業指導所ほか



図 22. 伊東敏光公開制作

アーティストトーク「現代アートって何??」

日 時：8月20日(土)

場 所：対馬市交流センター



図 23. アーティストトーク

ワークショップ「わっしょい!! ぼくら・わたしたちのお神輿」

日 時：9月11日(日)

場 所：対馬市交流センター

運 営：山本辰典・友定睦



図 25. ワークショップ「わっしょい!! ぼくら・わたしたちのお神輿」風景

ワークショップ「MY 神様のお面をつくろう」

日 時：9月11日(日)

場 所：対馬市交流センター

運 営：山本辰典・友定睦



図 24. ワークショップ「MY 神様のお面をつくろう」風景

ワークショップ発表「ぼくら・わたしたちのお祭り」

日 時：9月12日(月)

場 所：対馬市役所～厳原八幡宮



図 26. ワークショップ発表「ぼくら・わたしたちのお祭り」風景

滞在制作とワークショップ

報告：黒田大祐

はじめに

地方での滞在制作やアーティスト・イン・レジデンスは、様々な規模や形式で各地で行われている。こうした取り組みの背景には、地域振興やまちおこし等の思惑がある事が多く、展覧会としてその成果を発表するものがほとんどである。対馬での取り組みもこの一例であり、展覧会へ向けて滞在制作が行われた。ここでは展覧会からでは知る事が出来ない対馬での滞在制作の実際について述べていく。

リサーチ

今回の滞在制作は長崎県対馬市の厳原町を中心に行われた。参加メンバーは滞在制作で対馬を初めて訪れた者ばかりであり、大半の者が、厳原（いづはら）をはじめとする対馬の地名さえも読めない有様であった。事前のリサーチとしていくつかの文献を読んでいたのだが、やはり百聞は一見にしかずということで、対馬に到着してすぐに、参加メンバーそれぞれが、地域の協力者の案内によるリサーチを行った。北は比田勝（ひたかつ）から南は豆酏（つづ）まで対馬全島を巡り、数日にわたり史跡や文化財、対馬特有の風景や自然に触れ、その過程で地域の方々とのコミュニケーションを深めながら、実際の対馬を体験していく事となった。このリサーチは大変重要なもので、参加メンバーのほとんどが、リサーチの中で作品制作の材料やヒントを得て実際の制作に入っていく事になる。

材料

リサーチの重要性と影響は、それぞれの作品に表れている。例えば伊東は、対馬特有のスレート状の石「頁岩」を中心に対馬の様々な石を積み重ねることで作品を制作しているのだが、これら伊東の作品に見られる石や制作方法は、石屋根倉庫、ヤクマの塔、火切りの石垣¹と対馬の風景の中に容易に見いだす事が出来るもので、ここから着想を得たと思われる。他にもウオーゼンは、対馬の海岸を取り囲むテトラポットをモチーフに、対馬に残されていた鋳型で同形のテトラポットを制作しているのだが、これは車で海岸沿いの道进行の際に見える対馬の風景からインスピレーションを受けたと思われる。また、入江の《ヤマネコダスト》は対馬の焼酎瓶に描かれたツシマヤマネコをモチーフにしたものだが、この作品は、地域の方々との懇親会等でのコミュニケーションが契機と思われる、対馬での体験が率直に作品に活かされている例と言える。このように、対馬でのリサーチとそれに伴う様々な体験が、個々の作品制作の中で重要な要素になっており、直接的にせよ間接的にせよ、作品の中で材料やテーマとして用いられている事は間違いな

い。ここに挙げた作品に限らず、滞在制作で制作された作品全てに参加メンバーそれぞれの「対馬」をみる事が出来るだろう。

宿泊施設

リサーチや地域の方々とのコミュニケーションの重要性もさることながら、ほかに滞在制作に欠かせないものとして宿泊場所がある。宿泊場所というとホテルや旅館のような所を想像されるかもしれないが、予算や環境的な要因から、必ずしもホテルや旅館に泊まれるわけではない。対馬での宿泊場所もいくつかの理由から、ホテルや旅館ではなく厳原町今屋敷（いまやしき）の古民家であった。古民家と言っても言葉以上の意味は含まない単なる古い平屋の小さな民家で、8畳と4畳の二間と小さい台所の他に汲取の便所があり、風呂にいたっては庭を挟んだ屋外の小屋にあった。宿泊所のある厳原町今屋敷という所は対馬の中心地であるため家の小ささはある程度仕方が無いのだが、しかし、それに加えてこの決して広いとは言えない家に最大で8名程が寝泊まりしていたのだから、過酷な宿泊施設であったと言わざるをえない。反面、立地の良さはリサーチや地域の方々との交流には有利に働いたようで、精神的、体力的な過酷さはあるが短期間での効率的な滞在制作には適した環境であった。

制作場所 有明荘（ありあけそう）

宿泊場所が小さく作品制作は難しいということで、ほとんどの作品制作は必然的に別の場所で行なうこととなった。その一つに、展示場所にもなった有明荘がある。有明荘は元旅館の建物で、宿泊場所とは違って大きく、1階には、旅館の面影が残る広い玄関のほかに、受付カウンターと食堂、更には家主のプライベートの居住空間があり、2階には、6畳程の客室が9室ある立派な建物であった。この内の、2階の数室を制作場所として使用し、作品展示では、1階の玄関と食堂、2階の3室を会場として使用した。元旅館というだけあってそれぞれの部屋が完全に個室になっているので、細かな手仕事を必要とする作品制作には適した環境であった。ここでは田中の《白隠》と黒田の《サンダル通信使》《風》《うず》が制作され、そのまま展示された。



図 27. 有明荘外観

制作場所 砥石淵(とししぶち)

有明荘のほかの制作場所に、通称「砥石淵(とししぶち)」がある。砥石淵と言うのは宿泊場所から少し離れた場所の地名であり、正確には砥石淵倉庫とも言うべきだろう。この倉庫は、取り組みに協力的なある建築関係の会社の作業場兼倉庫であり、大学の工房程の大きさがある。フォークリフトも備えており、大型の彫刻作品も制作可能な作業場所としては申し分の無い倉庫であった。ここではウォーゼンの《迷子》と伊東の《月の教え》といった巨大な彫刻作品が制作された。具体的には、ウォーゼンはテトラポットの金型を運び込み、業者の協力を得てコンクリートを流し込み、塗装までを行った。伊東はグラインダー等を用いてスレート状の石の加工と仮組までを行った。重機等が備わった場所であった為、比較的大型の作品制作もスムーズに行われた。



図 28. 砥石淵作業風景

桃水館(とうすいかん) 西山寺(せいざんじ)

「有明荘」と「砥石淵」は対馬での作品の制作場所として代表的な2つであるが、これ以外にも制作場所はある。制作場所というよりも展示場所という方が正確かもしれないが、半井桃水館(なかいとうすいかん)、西山寺(せいざんじ)等がそれだ。桃水館は

対馬出身の小説家半井桃水²の生家跡に建てられた記念館で桃水の功績を記した施設である。ここでは丸橋が100円均一店のカゴを用いて対馬の特徴的な湾である浅生湾をモチーフにインスタレーションを展開した。桃水館は公民館としての利用もある事から、一般の利用者にまぎれての制作であったようだ。西山寺は由緒ある対馬の古刹であり、現在では宿泊施設も備えており、対馬で人気の宿として多くの観光客を迎えている。ここでは伊東が加工した石の組み立てと展示をおこなったほか、離れでは田中が畳を材料に作品を制作した。このようにインスタレーションや組み立て式の作品では、展示会場がそのまま仮の制作場所として機能する点は滞在制作以外のそれと同じだと言える。

交流

振り返ってみると、宿泊場所の小ささや過酷さに反して制作場所については比較的恵まれていたのではないと思われる。繊細な作業から大型の彫刻作品まで歩いていける範囲で全て対応が可能な環境というのはそうあるものではない。幸いにも対馬では作業場所に恵まれたわけであるが、この実現には地域の方々の協力が不可欠であった。これは宿泊場所や制作場所や展示場所に限らず、作品を制作する上でのリサーチや材料調達段階でもいえることであり、多くの地域の協力者によって滞在制作が成立していると言える。具体的には市役所職員の本石健一郎氏や豊田充氏は公私を問わず制作場所や材料に関する手配等で全面的に協力していただいた。また、対馬で出版業を営む永留史彦氏やNPO法人対馬郷宿の鍵本妙子氏には、リサーチの際のガイドを務めていただき、対馬に関する様々な知識をご教授いただいた。さらに地元の名物居酒屋「お多幸」の女将さんである江崎マス子氏には作品の材料や対馬の歴史や伝承についてご教授いただいた。ここに挙げられるのはほんの一部の方々と、実際にはもっと多くの方々のご協力を頂いている。そしてこうした方々との交流が滞在制作の醍醐味であり作品制作を下支えする基礎となっているのは確かな事だろう。

ワークショップ

地域の方々との交流を通して、参加メンバーは様々な情報や機会を得て、これを活かして作品を制作してきたわけだが、作品制作の他にも、ワークショップという形で地域にその成果を還元した。具体的には、「MY 神様のお面をつくろう わっしょい!!ぼくら・わたしたちの御神輿」と題した子供向けワークショップを開催した。内容は、数多の神々を祀る対馬にちなみ自分だけの神様の姿を想像しそのお面を制作するものと、その神様の御神輿を海岸の漂流物を材料に制作するという2つのもので午前と午後に分けて開催された。またここで制作されたお面や御神輿は、厳原の八幡宮のお祭りで仮装と併せて巡行し披露され、多くの参拝者の拍手とともに迎えられた。ワークショップを通じてではあるが、地域のお祭り

への参加は信頼関係なくしてはあり得ない事であり、参加メンバーと地域の方々との交流の実りを示す一つの証しと言えるだろう。

まとめ

地域を舞台とする滞在制作やアーティスト・イン・レジデンスとその成果発表として行われる展覧会のほとんどに、背景として「まちおこし」や「地域振興」の思惑がある。対馬での取り組みもその一例であり、他の取り組み同様に、そうした思惑と取り組みの成果について、また展覧会自体のキュレーションについて少なからず批判がある。一方で、こうした批判にまぎれて、作品への批評や滞在制作の実際について語られる機会は少ないように思われる。制度や枠組みの問題は語りやすく、個々の作品や、目に見えにくい変化や成果について語る事は難しい。これはある程度仕方のないことであり、地域での芸術に関する取り組みに限らず、芸術作品の鑑賞一般にも共通するものだ。しかし見落とされがちな成果が確かにある。それらは、見えにくく、分かりにくいものなのだが、その成果の在り所は、やはり作品とその作品を造るまでの過程であるリサーチや交流を含めた滞在制作にこそ見出せるだろう。これを踏まえ、本文では実際の滞在制作の様子が分かるように出来るだけありのままの状態を記すように努めた。

(注) 1. 石屋根倉庫は対馬島内で見られる伝統的な石の屋根の倉庫。スレート状の石を屋根板として使用している。ヤクマの塔は峰町木坂、青海地区の海岸に見られる小さな丸い石を積んだ塔。火切りの石垣は厳原中心部に見られる防火帯の石垣。

(注) 2. 小説家。樋口一葉の師匠として知られる

研究を終えて

報告：伊東敏光

本研究の舞台である対馬は、中国の歴史書「魏志倭人伝」にも記されているように、山が険しく農地が少ない絶島でありながら、古代から日本列島と中国大陸・朝鮮半島との中継地点として人や文物が往来し、日本にとっては国防の要衝であると同時に、大陸との文化的、経済的交流の窓口としての役割を果たして来た場所である。

本研究では、2011年の夏から秋にかけて、芸術学部の教員と大学院生および研究員等が延べ約一ヶ月対馬に滞在し、対馬の風土と歴史に直接触れながら作品制作を行った。また、本研究は、対馬市が主催する現代美術展「対馬アートファンタジア 2011」と連携、連動し、対馬の中心地である厳原地区の古民家や寺院、市役所庁舎や記念館等を会場に作品発表とワークショップによる展覧会をおこなった。

本研究代表者は、現代の美術において、作品と場との関係は益々大きな意味を持つと考える。特に近年日本の各地でおこなわれている地域共同体とアーティストが協力しておこなう「地域型アートプロジェクト」では、その地域に蓄積された様々な要素を芸術家の感性と経験によって引き出し、作品として具現化することが求められる。その観点から現在の対馬を見てみると、「防人」や「朝鮮通信使」をはじめとする特有の歴史を示す遺構や文物が数多く残され、またリアス式海岸である浅茅湾等に代表される独特の地形と風土を持つ対馬は、新たな表現を求めるアーティストに創作のためのインスピレーションを与えてくれる場所であり、大学で研究を続ける若いアーティストにとって現実社会と芸術表現の接点を考える上で絶好の場所であると言える。特に古代から現代に至る東アジアの文化交流の歴史を肌で感じることは、私達現代日本人の価値観や美意識を再認識することに繋がり、現代における独自の芸術表現の獲得が期待できる。

本研究に参加した芸術学部教員・研究員・学生は、対馬市役所の担当者や市民の方々から多くの情報提供を受け、また島内のあちこちを案内してもらいながら、それぞれの視点から対馬をリサーチし、作品プランを練り、実制作していった。その過程から生まれた作品は、明らかに作家の新たな創造性を引き出したと考える。

課題として残った点は、「対馬アートファンタジア 2011」という事業の地元への影響と貢献に関してである。「対馬アートファンタジア」は、対馬市が主催するアートによる文化振興事業であるが、公立の美術館もギャラリーもない対馬での現代アートの展覧会は、地元にとって身近な存在ではなく、事業の意味を問う声も多く聞かれた。前記のように本研究グループの目的は、アーティストの育成と新たな芸術表現の獲得にあるが、自治体との協力によって地域の文化振興への貢献を求められることも事実である。今後はワークショップやアーティストトークの内容や構成に関する研究を進めるなど、本事業への市民の関心を高める努力をするつもりである。

このようなプロセスを体系化し、アーティストの滞在制作を軸とした創作の場を対馬に設置し、芸術による国際的な文化交流の場をつくりだすことが、本研究グループと対馬市が共に目指すところである。